『アブサロム，アブサロム』に於ける語り——叙想法過去完了形と語り手達

矢　口　はるみ

(1988年11月19日受理)

I．はじめに

『アブサロム，アブサロム』(*Absalom, Absalom!*, 1936—以下『アブサロム』と略す) を論じる際に問題になるのは，一体どこから手をつけて良いかがわからないことだ，と J.W. Reed は述べているが，フォークナー (William Faulkner, 1897—1962) の作品中，これ程まで綿密に手法と主題が絡み合っているものもない[1]。それは，サトペン (Thomas Sutpen) の物語とクエンティン (Quentin Compson) を中心とする複数の語り手達による語りという二重構造を備えた作品であり，サトペン物語が存在しなければ，語りはあり得ず，又語りなくしては『アブサロム』が成立しないのであり，この二つを全く分離して論じることができないということから来ている複雑さである。しかし論じる際には，どちらかの構造にまず照準をあてなければならないので，語りの手法に着眼して小説全体を概観すると，次に挙げる二つの特徴を見出すことができる。

一つは直接法で語られる部分に於ては，seem, look, appear などの動詞，probably, maybe, perhaps, apparently などの副詞，それに as if (as though) に導かれた節が目立つことであり，もう一つは，叙想法過去完了形の多いことである。前者は R. Fowler が「疎遠の語」(words of estrangement) と名付けたもので，語り手達が事実を報告するのではなく，外側からの視点で出来事を解釈して行くために用いられていると言えるし，又後者も，もう既に起こってしまった過去の事柄について語り手達が推測し考えを述べていることを示しているのである[2]。

『アブサロム』に付記された年代記 (chronology) と年譜 (geneology) が小説中の事実であるとするならば，その一つ一つの事実をつなぎ合わせる過程，行為よりも思索による「なぜ」の追求こそ，この小説が担っている使命とでも言うべきものではないだろうか。南北戦争を狭む南部のアクチュアルな世界を主軸として，語り手達の紡ぎ出す想像の世界が展開しているのである。

さてこの小論では，語りの特質の中の叙想法過去完了形が，異った語り手達によってどのように使用されているかを調べることを手掛りとしつつ，各々の語りの質と『アブサロム』の主題とのつながりを考えてみることとする[3]。『響きと怒り』(*The Sound and the Fury*, 1929) では，ベンジー (Benjy)，クエンティン，ジェイソン (Jason)，そしてディルシー (Dilsey) の登場する各々の章が個性的な語りを聞かせてくれたし，『死の床に横たわりて』(*As I Lay Dying*, 1935) でも全篇を彩る内的独白には異った声音を聞き分けることができたのだが，『アブサロム』に於ては一見，語り手達の語り口は変化に乏しいように思われる。この印象が正しいものであるかどうかも分析できるようにと，語り手と，叙想法過去完了の形を次のように分けることとした。

語り手は，ローザ (Rosa Coldfield)，コンプソン氏 (Mr. Compson)，クエンティン，シュリーブ (Shreve McCannon)，そしていわゆる地の文の語りを担当する非人称の語り手 (impersonal narrator)[4]。

叙想法過去完了形については，should have+p.p., would have+p.p., might have+p.p., could have+p.p., must have+p.p., そして may have+p.p. の区別をもうけ，ought to have+p.p. の形は，ごく稀なので割愛することとした。F.R. Palmer などは，might の形も may とほとんど同じで，"It merely indicates a little less certainty about the possibility" と述べているのだが，大江三郎氏は，might の方が話し手の主観的判断の気持を強く出すものとしているし，伊藤健三氏も「過去において実際にはなかったことを知っているが，その起こる可能性のあることを述べる」形として might を説明しているので，フォークナーが使い分けをしているかどうかを見るためにも，両者を別々に数えることとした[5]。又，上に分類した語り手達は大部分，自らの声で語るのだが (G.N. Leech らが，narrative report of speech action 及び narrative report of action と呼んだものに当る)，時々は自分以外の人物の発話行為として語っているので，この部分については，主に“　”や‘　’で示される直接話法による語りを (D.S.)，又 that 節を省いた形の間接話法による語りを (I.S.) として付記し，発話行為 (speech act) としてよりも思索行為 (thought action) として語り手達が他人の「考え」について叙想法過去完了形を用いてい

Harumi Yaguchi

る場合は，その旨区別してみることとした[6]。

全体で9章から成る『アブサロム』は，その語りの時間と場所によってⅠからⅤまでとⅥからⅨまでとに大きく二分できるので，まず前半の叙想法過去完了の使用状態を一覧表にし，ローザそしてコンプソン氏の語りの特質と共に検討を加え，その後，後半について同じく一覧表と後半の主な語り手であるクエンティンとシュリーブ，そして全章を通じての非人称の語り手の語りについて論じて行くこととする。一覧表の中の数字は，その叙想法の使用回数を示し，原文には，助動詞（の過去形）＋have という形が省略されていても，文脈上，はっきりと叙想法とわかるもの(ex.…would have seen, looked)は回数に含めてあること，又 if 節を伴ったいわゆる仮定法過去完了の形はごく少ないので， if 節がある，なしの区別も省かせて頂いたことをお断わりしておく。

使用テキストは下記のものに拠ったが，小論中の（ ）中の頁数はすべてこのテキストからのものであり，原文引用の際テキストにあるイタリクス部分は特別な場合以外明記しないこととした。（テキストが余りに複雑な typography を用いているところへ加えて，筆者が下線を施したことを示すと，かえって本文が読みにくくなると思われたため）

William Faulkner, *Absalom, Absalom!* (reproduced photographically from a copy of the first printing : N. Y., Random House, 1964)

Ⅱ—（A） 前半の叙想法過去完了の使用状態

第1章（pp. 7—30）

1. 語りの時間と場所——1909年9月，正午すぎから午後おそくまで，ローザの家
2. 主な語り手——ローザ
3. 主な聴き手——クエンテイン
4. 主な話題——サトペンの紹介，ローザ自身，そして姉のエレンとの関係について[7]

（第2章より1.～4.の数字のみ記す）

叙想法／語り手	should	would	might	could	must	may	(計)
ローザ	5	9	5	17	3	1	40
非人称の語り手	3 (付1)	3	1				7
コンプソン氏			1	1		1	3
(計)	8	12	7	18	3	2	50

（付1） Leech らが区別した形で (F. D. T.) of Quentin (p. 9) が一回含まれる。(注)の6)参照

第2章（pp. 31—58）

1. 1909年9月，夕暮れどき，コンプソン家のポーチ
2. コンプソン氏（父親のコンプソン将軍—クエンティンの祖父—から伝え聞いた話やジェファソンの町という共同体の伝承としての語り）
3. クエンティン
4. サトペンのジェファソンの町に出現してからエレンへの求婚と結婚

	should	would	might	could	must	may	(計)
コンプソン氏	2	6	4	6	5		23
非人称の語り手	1	8		6			15
(計)	3	14	4	12	5		38

第3章（pp. 59—87）

1. 1909年9月，夜，コンプソン家のポーチ
2. コンプソン氏(自分の両親と自らの推測に基いて)
3. クエンティン
4. ローザについて，又ボンやジュディスについて

	should	would	might	could	must	may	(計)
コンプソン氏	2	23	5	10	8	5	53
(計)	2	23	5	10	8	5	53

第4章（pp. 88—133）

1. 1909年，夜，コンプソン家のポーチ
2. コンプソン氏
3. クエンティン
4. ジュディス，ボン，そしてヘンリーについて（ボンの性格描写と彼とヘンリーとの関係に重点を置く）

	should	would	might	could	must	may	(計)
コンプソン氏	6	26 (付1)	6	16 (付2)	22 (付3)	4	80
(計)	6	26	6	16	22	4	80

（付1） (D. S.) of Bon が2回 (p. 115, p. 116)
(D. S.) of Judith が2回 (p. 127)
（付2） (D. S.) of Bon が1回 (p. 116)
（付3） (D. S.) of Bon が1回 (p. 115)

第5章（pp. 134—172）

1. 1909年9月，正午すぎから午後おそくまで，ローザの家
2. ローザ
3. クエンティン
4. ローザとサトペン家の人々，特にジュディスとサトペンとの関係について[8]

	should	would	might	could	must	may	(計)
ローザ	8	16 (付1)	17	18	6		65
(計)	8	16	17	18	6		65

(付1) pp.169—171 でローザが自らを "she" で語り始めてから9回連続で見られる。

Ⅱ—(B) ローザの語り

「彼は紳士ではありませんでした」(He wasn't a gentleman) (p.14), そして,「私はエレンや自分の弁護のために話しているのではありません」(I hold no more brief for Ellen than I do for myself) (p.17) と繰り返し前置きしながら, クエンティンにサトペン物語を語りかけるローザは, 霊媒術師の様な妖気を漂わせている。彼女はサトペン, 自分の姉でサトペンの妻となったエレン (Ellen), その二人の子供のヘンリー (Henry) とジュディス (Judith), そしてボン (Charles Bon) といった人物を饒舌をもって語るのであるが, クエンティンが既にサトペン物語を知りつくしていることを理解している彼女が, なぜ敢えて古い物語を語らねばならないのだろうか? 小説を読み進むに従って, クエンティンと共にサトペン屋敷の探訪に出掛けたい彼女が, 同意を求めるために呼びつけたということが明らかになるのであるが, それとわかる迄には3時間かかるであろうとクエンティンが考えるほどの独白にも似た語り——実際に彼は,「はい」とか「いいえ」とか以外は口をつぐんでいる——の質とはいかなるものなのか[9]。

ジュディスの婚約者ボンがヘンリーに殺された, という知らせをウォッシュ (Wash Jones) から受け, サトペン家に駆けつけた彼女は, クライティー (Clytie) の制止を振り切り, ボンの死体が安置されているはずの部屋の前まで行こうと, 階段をかけ上るが, その時, どのように走ったかということは, ジェファソン (Jefferson) の町の人々からではクエンティンに伝えられないだろう, と彼女は言う。この, どのように—"how"—は, その場にいた者だけが体験しうるもので, 感覚によってとらえられるものであり, 事件に関わった者だけがそれを伝達できる特権を持つとも言えよう。

一体何が起ったのかということが背景に追いやられ, 驚ろき, 怒り, といった感情が前景化してしまった彼女の語り口は, アメリカンゴシックの祖とも言われる C. B. ブラウンの『エドガー・ハントリー』の中で, 語り手の一人が述べている「語り口が巧妙になり, 自在になるにつれ, 語るつもりの事件や動機は不完全にしか再現されず漠然としか描かれないことになるでしょう」という特徴を顕著に示しているのである[10]。

彼女は, ある時は "saw" を連発して語るのだが, それも一つ一つの印象を寄せ集めたコラージュのようでもあり, 因果関係はほとんど無視され, 突如, 我々の眼の前に絵として現われる。

> I saw what had happened to Ellen, my sister. I saw her almost a recluse, watching those two doomed children growing up whom she was helpless to save.
>
> .....
>
> I saw Judith's marriage forbidden without rhyme or reason or shadow of excuse ; I saw Ellen die with only me, ..., I saw Henry repudiate his home and birthright and then return... ; (p.18)

彼女にとって見たということは, 想像力の助けを借りて行う現実認識の表現なのである。前述のボンの死の知らせを受けた後の場面では, ついに彼の死体さへ目にすることができずに, 屋敷中にたち込める「とどろきわたる沈黙」(thunderous silence) (p.136) の中, 閉ざされたドアーの前に立ちつくさねばならず, ボンの葬儀の場面でも「音のない真空」(soundless vacuum) (p.151) の中に身を置かねばならなかったのである。幼い日には, 父や叔母に連れられて, 姉エレンをサトペン屋敷に訪ねたのだがその時も室内には入れてもらえず, 洩れ聞こえてくる声の端々をつなぎ合わせて大人たちの話の全体像を想い描くことしか許されにず,「雷鳴よりも大きなあの家の静寂さ」(quiet of that house louder than thunder) (p.27) の中で, 立ち聞きをする以外にはないのである。彼女をとり囲む世界は, さながらムンクの「叫び」のように, 人物達は精一杯叫んでいるのだがその声は抑圧されて内向しているとも言えよう[11]。

彼女の語りは第1章で非人称の語り手が「論理と理性を拒否する夢の特性」と名付けたものを備えていて, 彼女にとっての記憶も又, 事実を思い起す思考からは程遠いものなのだ。第5章で彼女は自らの語りの中で, 記憶の本質について次のように述懐している。

> That is the substance of remembering—sense, sight, smell : the muscles with which we see and hear and feel—not mind, not thought : there is no such thing as memory : .....and its resultant sum is usually incorrect and false and worthy only of the name of dream. (p.143) (下線部筆者)

藤の花のむせかえる香りの中で彼女は一度も出会ったこともないボンへの愛惜の念や, サトペンへの怨念を再体験して, 今クエンティンに語りかけているのだ。論理性のないはずの夢について彼女は,「とりかえしのつかぬ非現実としての過去」(the lost irrevocable might-have-been) (p.137) こそ, その夢の実体であると定義

を下し，真実の知恵とは，「真実よりもより真実らしい過去がある」(there is a might-have-been which is more than true than truth) (p.143) ことを知ることではないかと語るのであり，特に第5章に見られる叙想法過去完了の <might have> の形の急増には，ローザ固有の語り口を読みとることができると言えよう。

ボンの姿を生存中も，又死後も一回も目にしていないローザは，彼の死さえも「あったかも知れぬ」想像の世界の出来事として脳裏の奥に閉じこめざるを得ない。そしてサトペンが帰還する時まで，その非現実のときを結晶化させてしまい，ジュディス，クティティーと共に女三人で飢えを凌いで暮らして行くのである。

No, there had been no shot. That sound was merely the sharp and final clap-to of a door between us and all that was, all that might have been—a retroactive severance of the stream of event : a forever crystallized instant in imponderable time accomplished by three weak yet indomitable women.... (p.158) (下線部筆者)

サトペンが戻り，男子の直系嫡子を残すために彼女と関係してみてから後に結婚しようと申し出た瞬間に，サトペンさえも実在の人物としてではなく，歩く影 (walking shadow) と変貌してしまうのである。彼女がクエンティンと共にサトペン屋敷に行きたいと願うのも，年老いたヘンリーの姿をそこに発見することでボンの死を「あったかも知れぬ」ものから「確かにあった」ものとするために他ならない。

今まで述べてきたように主観性の強いローザの語りも第5章でサトペン物語を南部人の一人として，より広いパースペクティブから語るとき，自らを“she”と客体化し，叙想法の助動詞を“would”に変えている。(表の付記参照) 姉のエレンを含めてコールドフィールド家の人々，サトペンの一族，そして南部全体に降りかかった運命と呪いについて語る彼女の姿には，南北戦争中の窮乏生活にも耐えぬいてきたしたたかさを垣間見ることができるが，より客観的なサトペン物語の解釈は，次の語り手，コンプソン氏の手にゆだねられている。

II—(C) コンプソン氏の語り

“ ”を用いていることで辛うじて地の文の語りと区別される第2章と第4章，そして，その“ ”をも取り除かれてしまう第3章と，コンプソン氏の語りは“I think”や“I don't think”という科白がなければ，地の文を形成する非人称の語りと見紛うばかりである。サトペンと同時代に生き character-narrator でもあったローザとは異なり，専ら外側からの傍観者として登場する彼の語りの客観性は，この typography の仕掛けにも象徴されていると言えよう。

ローザの証言や父のコンプソン将軍から語り継がれた話をもとに，ある時は忠実な伝達者として，又ある時は自分なりの見解を加えて，コンプソン氏はジェファソンの町の人々の視点に自らのそれを重ね合わせてサトペン物語をクエンティンに語る。叙想法で <might have> の形よりも <would have> が多いこと，又数は少ないが <may have> の形を用いていることで，ローザの主観性の濃い語り口との差を認めることができるのであるが，彼の語りを根底から支えるもの，それは，「誰にも真実はわからないのだ」という諦観である。サトペンを外側からとり囲み，コンプソン氏によれば，コロスの様に一団となりサトペン物語に参加するジェファソンの人々と同様に，ヘンリーとボンの失踪はコンプソン氏にとっても不可解な謎そのものである。

—The Christmas Eve, the explosion, and none to ever know just why or just what happened between Henry and his father.... (p.106)

ジェファソンの人々は，直接サトペンと交渉することがなくなってからは，彼のひき連れてきた黒人達による噂話や報告を頼りに，おぼろげにではあるが，ヘンリーが相続権を放棄し家を出たことを知るのであって，勿論，「何故」の部分は欠落している。コンプソン氏によれば彼らは又，見ることによって一体何が起ったのかを推理する以外にサトペンとの直接の接触は絶たれているのであって，たとえば，サトペンの旅行鞄やバスケットの中味までも詮索する彼らは次のように遡求してゆくのである。

He wore a new hat now, and a new broadcloth coat, so they knew what the portmanteau had contained. They even knew now what the basket had contained because he did not have that with him now either. (p.46) (下線部筆者)

彼らはヘンリーのボン殺害の動機を探る際にもこの方法を適用している，とコンプソン氏は語る。すなわち，ボンには1/8混血ニグロの情婦 (octoroon mistress) がいて，彼女がボンとの間に生れた息子を連れてボンの墓参りに現われると，それを目撃した人々は，この情婦の存在こそ事件を解く鍵と思ってしまうという訳である。(p.201)

しかし，緻密に“because”を原因と結果をつなぐ鎖として論理を展開してゆくコンプソン氏にとっては，この情婦の存在やボンがジュディスと結婚すると重婚になるということが，充分なボン殺害の理由には思われないのである。氏は「ヘンリーとジュディスの間には普通の兄妹関係を超えた親密さが漂っていた」というジェファソンの人々の噂から“Because Henry loved Bon”とい

う唐突とも思える理由を考え出し，「ボンがジュディスを愛することはヘンリー自らが妹ジュディスを愛することに他ならない」という図式を導き出すのである。ボンのジュディスへの求婚は，ヘンリーの近親相姦志向の代償行為とみなされる。

In fact, perhaps this is the pure and perfect incest : the brother realizing that the sister's virginity must be destroyed in order to have existed at all, taking that virginity in the person of the brother-in-law, the man whom he would be if he could become, metamorphose into, the lover, the husband ; .... (p. 96)（下線部筆者）

彼は，妹の処女性がその存在証明のためには，失われなければならないということを考えるに忍びないヘンリーがボンを殺害したのではないかと推測するのであるが，「やはりまだ何かが欠けている」(yet something is missing) (p. 101) とクエンティンに告白するのであり，不可知論者としてコンプソン氏は一種のアポリアに陥るのである。

口承伝達されてきたサトペン物語は，元来解釈をこばむ判読不可能な昔の手紙のようなものであり，「知ってはならぬもの」(we are not supposed to know) (p. 100) でもあると匙を投げるが，その不可解さをギリシャ悲劇の枠組の中で不可解さそのものとして容認しようとするコンプソン氏は，運命論者となるのである。ヘンリーがボンを即座に殺さなかったのは南北戦争が勃発したからであり，又，彼がボンと共に南軍に加わり戦地でどちらか一方が死ぬことで自分の悩みも消滅するのではと期待したにも拘らず，4年後二人とも生還してついに悲劇的事件が起ったのも，サトペン家にふりかかった運命の仕業であるというのである。

It should have been all : that afternoon four years later should have happened the next day, the four years, the interval, mere anti-climax : an attenuation and prolongation of a conclusion already ripe to happen...maybe instigated by that family fatality which possessed, along with all circumstance, that curious lack of economy between cause and effect which is always a characteristic of fate when reduced to using human beings for tools, material. (pp. 118—119)（下線部筆者）

第4章での<must have>の形の増加は，この運命論にのっとり，少々強引ではあるが，アポリアから抜け出そうとするコンプソン氏の姿勢に合致してはいないだろうか。運命論と共に，コンプソン氏はサトペンと同時代人ではなく，事件の現場にいたことがないという条件を備えていたために，想像力を十分発揮できたということもつけ加えなくてはならないだろう。彼は“imagine”という言葉を畳かけて使い，クエンティンにヘンリーとボンの姿を彷彿とさせる[12]。その迫力ある語りは，前述のボンの情婦が息子と共にボンの墓に詣でる場面で最高潮に達し，舞台に登場する人物達をクエンティンの眼の前に描いてみせるのである。彼は叙想法も交えて次のように語る。

...: the pageant, the scene, the act, entering upon the stage—the magnolia-faced woman a little plumper now, a woman created of by and for darkness whom the artist Beardsley might have dressed, ... (p. 193)

又，ヘンリーは田舎者で，直観的に物事を判断し，激しい行動力を秘めていたものの思考 (thinking) は苦手であったと，性格描写を行ったコンプソン氏は，より謎めいた人物であるボンに叙想法を用いて推理させ，それを直接話法で発話させてもいるが，これは叙想法をすべて自身の語りの中で使用していたローザとの相違点でもあり，次に登場する語り手のクエンティンやシュリーブにもひき継がれてゆく手法でもある。

Ⅲ—(A) 後半の叙想法過去完了の使用状態

第6章 (pp. 173—216)

1. 1910年1月，夜更け，ハーバード大学の寮の一室（過去の語りの場面はサトペン家の墓地）
2. シュリーブ——クエンティンの話をもとにして（過去の語り手はコンプソン氏）
3. クエンティン
4. ジュディス，サトペンの南北戦争後の運命，ボンの子孫などについて

	should	would	might	could	must	may	(計)
シュリーブ		10	4	4	1	2	21
コンプソン氏			7	9	2	1	19
非人称の語り手		3 (付1)	3 (付2)	4 (付3)	4 (付4)		14
曖昧な語り手(注1)			1 (付5)	1	3		5
(計)		13	15	18	10	3	59

(注1) pp. 181～187で，非人称の語りが...thinkingで終わった後，イタリクス体でクエンティンの思考を(D. T.)として導入してゆくが，途中 p. 185で“yes,” Quentin said. とクエンティンの相槌が入ることで，シュリーブの語りとも思わせる部分。

(付1) (F. D. T.) of Quentin が2回 (p. 207)

(付2) (F.D.T.) of Quentin が2回 (p.207)
(付3) (D.S.) of Quentin (p.191)
(F.D.T.) of Quentin (p.190)
(付4) (D.S.) of Quentin (p.191), その他にも thinking about や imagining what などに続けて用い，(N.R.T.A.) として，クエンティンの思考に関わっている。
(付5) (D.S.) of Wash (p.187), ここでは mought have とウオッシュの idiolect を用いている。

第7章 (pp.217—292)

1. 1910年1月，深夜，ハーバード大学の寮の一室（過去の語りの場所は，サトペン屋敷や，コンプソン将軍の事務所，そしてコンプソン家のポーチ）
2. クエンティン（過去の語り手は，サトペン，コンプソン将軍，コンプソン氏）
3. シュリーブ（過去の聴き手は，クエンティン，コンプソン氏，コンプソン将軍）
4. サトペンの子供時代，及びハイチでの経験と彼の抱いた design，ウオッシュによるサトペン殺害

	should	would	might	could	must	may	(計)
非人称の語り手	1	3	2	1			7
シュリーブ		1	1 (付1)		1		3
コンプソン氏	1	1	2				4
クエンティン	2 (付2)	27 (付3)	17 (付4)	25 (付5)	27 (付6)	8 (付7)	106
(計)	4	32	22	26	28	8	120

(付1) (D.S.) of Wash (p.280)→"mought have" として
(付2) (I.D.S.) of Sutpen (p.274)
(付3) (D.S.) of Sutpen 2回 (p.242, p.264)
(I.D.S.) of Sutpen (p.220)
(D.S.) of Grandfather (p.265)
(I.D.S.) of Grandfather 3回 (p.250, p.263, p.273)
(I.D.S.) of Father 2回 (p.281, p.282)
(付4) (D.S.) of Sutpen (p.264)
(I.D.S.) of Sutpen 3回 (p.233, p.273, p.273)
(D.S.) of Mr. Compson 2回 (p.279)→クエンティンの語りに非人称の語り手が介入しており Father ではなくなっている。原文ではイタリクス体。
(I.D.S.) of Grandfather (p.263)
(付5) (D.S.) of Sutpen 2回 (p.243, p.264)
(D.S.) of Grandfather (p.265)
(I.D.S.) of Grandfather 4回 (p.257, p.257, p.262, p.273)
(D.T.) of Wash 2回 (p.287, p.288)→p.288 では "I kain't have" として
(付6) (D.S.) of Grandfather (p.265)→not saying の後で
(I.D.S.) of Grandfather 3回 (pp.247—248, p.252, p.262)
(I.D.S.) of Mr. Compson 5回 (p.267, p.267, p.285, p.285, p.288)
(付7) (I.D.S.) of Mr. Compson 2回 (p.285)

第8章 (pp.294—359)

1. 1910年1月，深夜 (12：00～午前1時)，ハーバード大学の寮の一室
2. シュリーブ（クエンティンの話をもとにして）
3. クエンティン
4. ボンとヘンリーが直面するジレンマ

	should	would	might	could	must	may	(計)
シュリーブ	5 (付1)	26 (付2)	5 (付3)	20 (付4)	13 (付5)		69
非人称の語り手	1	4	1	4	1 (付6)	1	12
曖昧な語り手(注2)		5 (付7)	1	3 (付8)	6	6	21
(計)	6	35	7	27	20	7	102

(注2) 一ケ所は，p.346 で非人称の語り手によるクエンティンとシュリーブの描写の後に：がありその後（ ）中のイタリクス体で，彼ら2人がヘンリー，ボンと重なり合い4人になったり，2人2組になったりする場面。
もう一ケ所は，pp.351～358 で前を非人称の語り，後をシュリーブの語りで狭まれた一種独特の中立，真空地帯とでも呼ぶべき場面——(p.351) They were both in Carolina and the time was forty-six years ago, and it was not even four now but compounded still further, since now both of them were Henry Sutpen and both of them were Bon, compounded each of both yet either neither, smelling the very smoke which had blown and faded away forty-six years ago from the bivouac fires burning in a pine grove....
中略（この部分が，曖昧な語り）
(p.358)—You will have to stop me, Henry. "And he never slipped away," Shreve said.
（下線部は，いずれもテキスト中のイタリクス体を示す）
(付1) (D.T.) of Bon (p.321)
(D.S.) of Bon 2回 (p.341)
(付2) (D.T.) of Bon 2回 (p.329)
(D.S.) of Bon 3回 (p.331, p.341, p.341)
(付3) (D.S.) of Bon (p.344)
(付4) (D.T.) of Bon 2回 (p.321)
(付5) (D.S.) of Bon (p.331)
(D.S.) of Henry (p.343)
(付6) (F.D.T.) of Charles-Shreve and Queutin-Hevry (p.334)—Charles-Shreve and Quentin-Henry, the two of them both believing that Henry was thinking..., not for one moment

thinking He (meaning Bon) must have known or at least suspected this all the time ; ....
この部分では，ボンの思考をヘンリーが思考し，それをいまやボンとヘンリーに我が身を重ね合わせたシュリーブとクエンティンが思考するという三重の構造を用いている。
（下線部はテキスト中のイタリクス体を示す）

(付7) (D.S.) of Bon (p.356)
(付8) (D.S.) of Bon 2回 (p.356)
(D.S.) of Henry (p.357)

第9章 (pp.360—378)

1. 1910年1月，午前1時頃，ハーバード大学の寮の一室
2. 非人称の語り手（シュリーブも少し語る）
3. クエンティン（シュリーブの話に）
4. サトペン屋敷探訪でクエンティンの発見したもの，そしてクエンティンが傾聴し継けてきたサトペン物語は彼にどのような効果を与えたか。

	should	would	might	could	must	may	(計)
非人称の語り手		7 (付1)		1	3 (付2)	3	14
(計)		7		1	3	3	14

(付1) (D.T.) of Quentin (p.368)
(付2) (D.T.) of Quentin (p.369)

Ⅲ—(B) クエンディンの語り

第7章に到り初めて長い間聴き手の立場にあったクエンティンが語り手に転じるのであるが，その特質を考察する前に，第6章における彼の存在に注目しなくてはなるまい。第6章では小説における語りの現在の主役はシュリーブでありながらも，表からも察しられるように，現在と過去（こちらはコンプソン氏が語り手）双方のサトペン物語に耳を傾け，既に過去と現在とが意識の中で渾然一体となっているクエンティンの姿がネガティブな像としてではあるが浮彫りにされてくる。加えて6章の表の(注1)に述べたように，非人称の語りによって彼の思考が（F.D.T.）の形で導入された部分は，語り手シュリーブの声と聴き手である彼の意識とが完全に一致している状態を示唆してもいるのである。

彼はシュリーブが「まるで父のような話しぶりをする」(He sounds just like father) (ex. p.181, p.211) と重ねて呟くが，父コンプソン氏と識別できない語りを可能にさせたのは誰あろうクエンティン自身なのである。寮友のシュリーブが南部の話をせがむたびに，父から再三再四聞かされたであろうサトペン物語を語ったのは彼であったからだ。父の声音と共に自分自身の語りの声をも又クエンティンは耳にしているという訳なのである。

その彼は寡黙のままサトペン物語を反芻し，コンプソン氏が想像（imagine）したように，各々の場面を見る（see）ことができるのであり，例えばサトペンが南北戦争中に死亡した妻エレンの墓石を運びこむ場面で非人称の語り手は次のようにクエンティンの内面描写を行うのである。

... ; he Quentin could see it ; he might even have been there. Then he thought No. If I had been there I could not have seen it this plain. (p.190)（下線部は原文のイタリックス体を示す）[13]

さてついに第7章でクエンティンは読者に肉声を聞かせてくれるのだが，叙想法の表の付記からもわかるように祖父コンプソン将軍や父の（D.S.）や（I.D.S.）を交えながら今まで語られてきたサトペン物語を踏襲してゆくに過ぎないと言えよう。なぜヘンリーがボンを殺害したのかという謎を解くための解釈の作業は行わずに，依然として忠実な伝達者の立場を貫く彼は，コンプソン氏に倣ってある時は叙想法<must have>の形を（I.D.S.）の中で連ねていて，『響きと怒り』第2章の“Father said”を繰り返すクエンティン像とも殆ど区別がつかない程である。

ただ彼は今までローザやコンプソン氏からは得られなかった情報，すなわち不透明であったサトペンの出生や前歴といったジェファソンに出現する以前の彼の素姓を提供してくれる。この部分は主に祖父から語り継がれたものではあるが，サトペン自身が，自分の荘園を建てている最中に逃亡をはかったフランス人建築師を，黒人たちや，親友でもあった祖父と追跡する途中に丸太の上に腰をおろして休憩しながら語ったという設定になっており，かなりの現実性を帯びたものとなっている。ローザによって歩く影として葬り去られ，コンプソン氏の手によって運命に翻弄される英雄像にも変貌したサトペン自らが血肉を備えた人間として甦り，口を開くのである。

大土地所有者や黒人のいない社会で生れたサトペンは幼年時代のある日父の代理で大荘園に使いにやられ，正面玄関で猿面をした黒人の召使いに裏口へまわるよう指示されて衝撃をうける。この事件の意味が理解できず森に避難しその静けさに浸りながら内省するサトペン，黒人種をはじめとして，自分自身の属する貧乏白人（poor white）といった階級による差別が存在することさえ知らなかったサトペンの無垢（innocence）の喪失の過程をクエンティンは“think”と“know”の二つの動詞を連鎖させて語ってゆく。サトペンにとって黒人種はあくまでも想念の世界にのみ存在する実体のない，まるで風船のように手ごたえのないものであり，復讐の対象とはなりえない。以後彼は，金持ちの大荘園主になる

という計画（design）を胸に抱き人生を歩み始めるわけであるが，ヘンリー亡きあと男子の直系嫡子を失ったサトペンは，その計画のどこに誤まり（mistake）があったのかを究明してゆく時に，自分自身で叙想法も用いているというわけなのである。

彼はエレンと結ばれる以前に，ハイチで砂糖黍農園主の娘ユーラリア（Eulalia Bon）と結婚するが，チャールズという息子（『アブサロム』中で通称ボン）が生れると彼に黒人の血を認めて即座に離婚したことを，コンプソン将軍に明かしていたのだ[14]。義父からユーラリアにはスペイン人の血も混っていることは知らされていたのだが，彼にとっては青天の霹靂にも等しい打撃であった。自分の祖先については充分説明していたという彼は，叙想法を交えて意見を述べるが，以下その一部を記してみよう。

> ...：yet they deliberately withheld from me the one fact which I have reason to know they were aware would have caused me to decline the entire matter, otherwise they would not have withheld it from me—a fact which I did not learn until after my son was born. (p. 264)（下線部筆者）

抽象的な存在であったはずの黒人種も，サトペン自身の計画遂行にとっては障害であり排除しなくてはならなかったのであるが，重要なことは，サトペンがユーラリアの黒い血を事実としていることである。彼らが結婚前に隠していた故にサトペンはスペイン人の血以上の存在を推測したのであろうが，ユーラリアの黒い血については誰も事実と断定してはいないし，フォークナー自身も彼女の説明を系譜の中で，“Only child of Haitian sugar planter of French descent” としており，年代記の方には “1833 Sutpen learns his wife has negro blood...” とのみ記し “fact” という言葉は避けている。(p. 380, p. 382) 貧乏白人として見られてしまったサトペン，そして黒人と思われてしまったユーラリアとボン，彼らこそ小論のⅠで述べた疎遠の語，そして叙想法による語りそのものを要請していると言えよう。サトペンの “think” から “know” の移行は ”fact“ そのものに到るのではなく，“believe” することに他ならないのである。そしてサトペンは結局計画の誤まりがどこにあるかを発見できないまま，嫡子を求めローザとの結婚も叶わずに，ウォッシュの孫娘ミリー（Milly Jones）とも関係し，ウォッシュの大鎌によって倒されるという最期を迎えるのである。

第7章でサトペンの一生は完結され，語り手クエンティンは，ボンがサトペンの息子であるという事，そしてボンの体内にも黒人の血が流れているであろうという事を祖父，そしてサトペン自身の言葉からシュリーブに告げるのみで，ヘンリー—ボン—ジュディスの関係，特にヘンリーのボン殺害についての解釈は次のシュリーブに委任されてゆくのである。しかしクエンティンは自分，そして自分たち（シュリーブと二人）の語りはサトペンに収斂されてゆくことを体験し，充分憑依への準備が整ったことを次のような語りで明らかにしてくれるのである。彼は父やサトペンと同化する自分を見据えて言う。

> Yes. Maybe we are both Father. Maybe nothing ever happens once and is finished. Maybe happen is never once but like ripples maybe on water after the pebble sinks, ...：...Or maybe Father and I are both Shreve, maybe it took Father and me both to make Shreve or Shreve and me both to make Father or maybe Thomas Sutpen to make all of us. (pp. 261—2)

たとえ自らの語りもサトペン自身の語りの谺にすぎず，祖父や父たちの語りと同工異曲にすぎないとしても，とにかくクエンティンは語る者となることによって，もろもろの統一体（entity）としての自己を確実に把握することが出来たと言えよう。第1章で，ハーバード入学を前にしてローザのサトペン物語に耳を傾けていた彼は，南部の亡霊の一人とも呼ぶべき彼女の話を聴かねばならぬ自分と，亡霊の一人になるべき運命にある自分に分裂していたのだが，彼も今やサトペン物語の渦中に身を置くことができたのであって，サトペン自身の語りを‘ ’中の（D.S.）で表現する時には，サトペンが話を止めて一呼吸するのと同様に自分も語りを停止させるほどの感情移入までやってのけているのである[15]。

Ⅲ—（C） シュリーブの語り

第8章の叙想法の表の（注2）でふれたように，クエンティンが語り終えるとシュリーブやクエンティンはボン及びヘンリーへと自由自在に憑依し，想像の世界で時空を超えて語りあうのであり，過去と現在は交錯し又溶け合うのである。語り手の複合化あるいは曖昧さはこの憑依によってもたらされたものであり，今や語り手シュリーブにとっても，聴き手クエンティンにとってもどちらが話しているかは問題ではなく，二人の想念，そして思考と発話は一致する。

> They stared—glared—at one another. It was Shreve speaking, though save for the slight difference which the intervening degrees of latitude had inculcated in them (...), it might have been either of them and was in a sense both：both thinking as one, the voice which happened to be speaking the thought only the thinking

become audible, vocal ; .... (p. 320) (下線部筆者)[16]

しかし，とにかく音声を発しているのはシュリーブで，彼はクエンティンがサトペンの思惟活動を無垢の消滅の過程として内面から描出していた方法を継いで，ボンが父親であるサトペンからの認知 (recognition) の眼差しを求めてゆくという筋書きを考案するのである。第7章で思索を練るには最適の場所 (what we call the best of thought) (p. 258) と形容された凍てつくハーバード大学の寮の一室という空間で，シュリーブは主にボンの視点からサトペン物語を創造してゆく。彼は表で見たように，ボンの(D. S.)の形の中にも叙想法を使用し，クエンティンが実際のサトペンの発話として (D. S.) や (I. D. S.) を用いていたのとは対照的に推論によって語りを導き出すのである。ボンの (D. S.) はある時は (F. D. S.) と分類した方が適切とも思われるほどの劇的な情況においての発話とされ，シュリーブの語りはまさに『アブサロム』の語りの手法の中で異彩を放っているのであり，劇中では登場人物の思念はしばしば独白形式を伴って表現されることを考慮すると，シュリーブが演じるボンの科白も又，対話というよりもむしろ各人物の心情の吐露になっているのもごく当然と言えよう[17]。

ボンは南軍に加わっていた時，サトペンと会見したにも拘らず父親としての反応を何も認められずに傷心し，ヘンリーに語りかけたという全く想像の場面を引用してみる。

—think how they must have talked, how Henry would say, 'But must you marry her? Do you have to do it?' and Bon would say, 'He [Sutpen] should have told me, myself, himself. ...If he had, I would have agreed and promised never to see her or you or him again. But he didn't tell me. ...' (p. 341) (下線部筆者)

サトペンが自分を息子と認め，真実を話してくれていたならば，ジュディスとも以後交際しないと決心したであろうにと，仮定法過去完了でボンに語らせるシュリーブは，近親相姦の可能性を仄めかしてもいる。更にこの場面のすぐ後 (表でもふれた語り手が交錯する部分) では，叙想法を劇形式の中にとり入れて，ヘンリーが容認しえなかったものは黒白雑婚 (miscegenation) であったという解釈をしてみせるのである。今度は先程の引用文の場面にひき継いで，ヘンリーが戦場でサトペンと会い，「ねえお前」(my son) (p. 352) と呼びかけられ，ボンの混血について告げられてからテントに戻りボンと対面するという大団円であるが，ヘンリーはほとんど黙して語らずにおり，ボンの独白，独壇場という感じさえ抱かせる。

—So, it's the miscegenation, not the incest, which you cant bear.

Henry doesn't answer.

—And he sent me no word? He did not ask you to send me to him? No word to me, no word at all? ... He would not have needed to ask it, require it, of me. I would have offered it. I would have said, I will never see her again before he could have asked it of me. He did not have to do this, Henry. He didn't need to tell you I am a nigger to stop me. He could have stopped me without that, Henry. (p. 356) (テキストでは全文がイタリクス体，下線部筆者)

南部人クエンティンがサトペンの語りの再現の中で暗示した可能性にすぎなかった近親相姦や黒白雑婚を，ヘンリーの超克できない障壁であったと断言することこそ，カナダ人シュリーブに課せられた役割であったと言えよう。クエンティンの言語化されなかった思考の中に存在する黒人種に対する恐怖を，シュリーブは発話という具体的な形で表現することに成功したのである。

IV. 非人称の語り手について，及びまとめ

今までの分析から『アブサロム』を構成する語り手達，そしてサトペン物語に登場する人物達が叙想法を一貫して使用していることが明らかになったのであるが，客観的な叙述を担うはずの非人称の語り手さえも，その頻度は少いものの叙想法に無縁ではないことが，小説全体を更に曖昧にしている。その極限の形ともいえるのが，第8章の表の(付6)の部分ではなかろうか。ここでは前述のようにシュリーブが劇的な語りを展開する間，彼とクエンティンはお互いみつめ合っており，映像化し憑依するボンとヘンリーも又，対面したままなのであって，そこには必然的に合わせ鏡のような情況が生れ，ゴシック的語りの特徴の一つとも言われる入れ子細工式の多層の語りが成立するという訳である[18]。そしてこの章においてさえも非人称の語り手はシュリーブの語りについて，「たぶん，そうしたであろう」とか「充分真実味はある」とか「おそらく正しいだろう」などとかの発言をもって容喙するのみであって厳密な意味での正誤の判断は下していない[19]。ただ登場人物たちの思考に自由に侵入できる非人称の語り手は，第1章から9章まで特にクエンティンの思惟を (F. D. T.) によって描出してみせ，一見聴き手の立場に甘んじているかに見えるクエンティンこそ，語りの中心人物であることの一つの証しをしてもいると言えよう。従って，第8章がいかに大団円であろうとも，ここで『アブサロム』は完結できるはず

がなく，主に地の文のみとなる第9章が登場するのであり，この章でサトペン物語の中の亡霊の一人ヘンリー自身がクエンティンの回想場面に姿を見せるのである。（第1章で宙吊りになっていたローザの語りがここに到ってまとまりをつけられるとも解釈できる。）ローザと共にサトペン家を捜索しに行ったクエンティンは，ボン殺害の後消息を絶っていたヘンリーが老体を横たえて死を待つばかりである場面を目撃し，彼と言葉を交わし合うのだが，このやりとりは全く叙想法を使用せずに，非人称の語り手がクエンティンの思考を透視する方法で描かれるのであり，実際にこのような会話が存在したかということは別問題としても，この描出法によってヘンリーの実在感が強調されていると思われる[20]。

> ...: the bed, the yellow sheets and pillow, the wasted yellow face with closed, almost transparent eyelids on the pillow, the wasted hands crossed on the breast as if he were already a corpse; waking or sleeping it was the same and would be the same forever as he lived:
>
> And you are—?
>
> Henry Sutpen.
>
> And you have been here—?
>
> Four years.
>
> And you came home—?
>
> To die. Yes.
>
> .... (p.373)（下線部はテキストのイタリクス）

もしも叙想法の欠如が小説中の現実性（アクチュアリティー）を裏書きするとしたら，『アブサロム』にとって重要なものとして，直接法のみで書かれた二通の手紙について述べないわけにはゆかないであろう[21]。

戦争中にボンがジュディスに宛てたのが最初の一通で，第4章でコンプソン氏がサトペン物語を語る際に手にしていたものの，文面はその章が終るまで明らかにされない。ボンが“Imagine us”とジュディスに呼びかけながら南北戦争の悲惨さを訴え，二人は共に運命共同体であると書き綴られたこの手紙は確かに，叙想法<must have>をも多用しながら宿命観を基調に推理を行ったコンプソン氏の背後に実在していたのである[22]。

二通目は，第6章の冒頭でクエンティンとシュリーブが対座している中央のテーブルに置かれているコンプソン氏がクエンティンに宛てた手紙で，こちらも章の途中，便箋が3/4程開かれていることが告げられるのみで，第9章まで姿を見せない。最終章で，クエンティンと同じベッドに入ったシュリーブが，サトペン屋敷に頻死のヘンリーを助けるため救急車と共にかけつけるローザの姿を語る時，この手紙は忽然と現われてくるのであるが，シュリーブによる第8章の創造的語りのさ中にも黙して存在しつづけたのである。

ここで小説全体の叙想法と語りの質とを総括的に眺めてみると，全体としては<would have>を中心に各章毎に均等に叙想法が使用されていたこと，又明確な法則性を見出すには到らなくとも各々の語り手の語りの質の変化に伴って叙想法の助動詞に差異が認められたこと，更にそれにもまして発話形式の変化が叙想法の中にも見られたことなどが挙げられよう。次に第三の点について少し述べてみたい。

ローザやコンプソン氏が大部分を自らの語りの中に叙想法をとりこみ自在に語るのは，彼らがクエンティンという聴き手を前にしながらもその語りは彼の反応とは無関係に進められ，自分一人で成立する独白に近いものであったからと言えようし，それは黙して聴き続ける人物を無視しても語ることが可能な修辞的なものであったのである。それに対して，シュリーブとクエンティンの語りは思考と発話の一致を伴った共同作業であり，その対話こそ弁証法的な発展を遂げる語りを生み出すことができたのだ[23]。

そして彼ら二人の創造的な作業によって，サトペンは伝説上の，あるいはコンプソン氏の場合のように神話中の人物から，歴史上の人物へと転換することができたのでもある。第1章でローザの話を傾聴するクエンティンにとって，サトペン物語の登場人物たちの名前は互換性を備えて無数に存在していた（the mere names were interchangeable and almost myriad)(p.12)のであり，第2章ではサトペンの引きつれてきた黒人たちについての話は伝説（the legend of Sutpen's wild negroes)(p.36)としてジェファソンの町の人々に伝えられたのであり，サトペン自身でさえも身の上話を語る時に他人事の様であったのである。

> He was not bragging about something he had done; he was just telling a story abut something a man named Thomas Sutpen had experienced, which would still have been the same story if the man had no name at all, if it had been told about any man or no man over whiskey at night. (p.247)

しかし伝説の要因ともなっていたサトペンの過去の不分明な部分が次第に解明されてゆき，ヘンリー，そしてボンと混血情婦の孫にあたるジム・ボンド（Jin Bond）をサトペン屋敷で発見したクエンティンは，第9章の終り近くではもはやシュリーブの“Aunt Rosa”という呼称を“Miss Rosa”と訂正さえしないのであり，サトペンは象徴的存在であるとともに，いやそれにも増して歴史上の，そして南部の歴史上の人物へと変貌をとげたと言えよう[24]。

Leon Edel は，T.S. Eliot の Four Quartets 中の "Burnt Norton" を一部引用してフォークナーの作品の特徴を次のように述べている。

Time past and time future
What might have been and what has been
Point to one end, which is always present,
is at the very core of the work of William Faulkner.[25)]

（下線部は Eliot の詩よりの引用）

『アブサロム』に多用された叙想法も，すべてを現在に収束させることに欠かせぬ手法であったと思われる。

（注）

1) Joseph W. Reed Jr., *Faulkner's Narrative* (New Heaven ; Yale Univ. Press, 1973), p.145.

2) Roger Fowler, *Linguistics and the Novel* (1977 ; revised and rept. N.Y. : Methuen & Co., 1983), p.92.

3) 大橋健三郎教授還暦記念論文集刊行委員会編『文学とアメリカⅢ』(南雲堂，1980)，pp.378—388.参照原川恭一氏は「叙想法過去完了形の世界」と題する論文の中で，運命に抗いつつも最終的には個人的なカタルシスのみしか見出せない作家フォークナーの世界観について述べ，『アブサロム』にも言及している。

4) 地の文の語り手は全知的 (omniscient) ではないので，impersonal narrator の訳語を当てることとする。
Cf. Gerald Prince, *Dictionary of Narratology* (Lincoln : Univ. of Nebraska Press, 1987), p.42.
impersonal narrator—A maximally covert narrator ; a narrator with no individuating property other than the fact that he or she is narrating.

5) Cf. 1. Frank R. Palmer, *Modality and the English Modals* (London Longman, 1979), p.48.
2. 大江三郎著『動詞Ⅱ』(研究社，1983)
3. 伊藤健三著『心態の表現』(研究社，1968)

6) Cf. Geoffrey N. Leech and Michael H. Short, *Style in Fiction* (N.Y. : Longman, 1981), pp.318—351.
<variety of speech presentation> の区分を簡略にして記しておくこととする。
1. (NRA)—Narrative Report of Action 発話に限らぬ描写一般
2. (NRSA)—Narrative Report of Speech Action (ex. He promised to return)
3. (IS)—Indirect Speech
4. (FIS)—Free Indirect Speech, (IS) から reporting clause を除いた形
5. (DS)—Direct Speech
6. (FDS)—Free Direct Speech, (DS) から" "を除いた形
思考については，同様に 2′—6′ の区別を設けている。
2′ (NRTA)—Narrative Report of Thought Action
3′ (IT)—Indirect Thought
4′ (FIT)—Free Indirect Thought
5′ (DT)—Direct Thought
6′ (FDT)—Free Direct Thought
『アブサロム』中の say to oneself は，思考描写に含めた。

7) 叙想法過去完了の使用数の統計表の前に，各章の語りについての簡単なまとめをのせたが，これは下記のテキストを参考にした。
Hugh M. Ruppersburg, *Voice and Eye in Faulkner's Fiction* (Athens : The University of Georgia Press, 1983), pp.97-99.

8) Cf. John T. Matthews, *The Play of Faulkner's Language* (Ithaca : Cornel Univ. Press, 1982) 彼によれば，第5章の語り手はローザー人に限定できず，クエンティンや非人称の語り手の意識などと混稱した複合的な語りということになる。しかし『アブサロム』全体としては，イタリクス体は思考の描出のために使用されている場合がほとんどである事や，語り口からもローザの語りとしておいて妥当と思われる。なお，Ruppersburg は，前掲書で，語り手は Miss Rosa, as remembered by Quentin としている。

9) *Voice and Eye in Faulkner's Fiction*, p.94. で Ruppersburg は『アブサロム』の語りを一頁につき2分として計算すると，第5章は80分位かかり，実際の発話とは考えにくいと述べている。『村』に登場するスノープスらの会話と異なり，フォークナーは話し言葉らしさ (the verisimilitude of spoken language) を読者に受け入れてほしいとは願っていないのだとも主張しているが，第1章と第5章のローザの語りの合計はクエンティンの予測した3時間にほぼ匹敵するのであり，少なくとも長さの点に関しては現実的な面も無視できないのではないだろうか。

10) C.B.ブラウン著，八木敏雄訳『エドガー・ハントリー』(国書刊行会，1979)，p.12.

11) ラインホルド・ヘラー著，佐藤節子訳『エドヴァル

ト・ムンク叫び』(みずず書房,1981), p.75. 参照。ヘラーは「ある気分, 心理的な情況がはじめにあり, そのリアリティーが, 外の世界に押し出されると世界は感情に包みこまれて目に見えぬ心の真実の視覚的相関物となる」とムンクの絵について述べている。

12) William Faulkner, *Absalom, Absalom!*, pp.107—8. 参照。
I can imagine them as they rode, ……
I can imagine how Bon told Henry, broke it to him. I can imagine Henry in New Orleans, ...

13) W. Faulkner, p.189. にも同様に see を用いての描写が見られるし, 第4章にも既に次のような非人称の語りがあった。He〔Quentin〕could almost see her〔Rosa〕, waiting in one of the dark airless rooms. .... (p.88)

14) シュリーブはクエンティンに「ボンがサトペンの息子であり, 黒人の血が混じっていることをコンプソン氏が知っていたら重婚などという解釈をボン殺害の動機として持ち出さなかっただろうに」と尋ねるが, クエンティンは, 祖父は父に総てを語ったというわけではなかったのでこのことを知らなかったのだと答え, 自分は, ローザと共にサトペン屋敷を訪れた際に知ったのだと言う。ローザからの話としてではなく祖父からの伝聞として, この章でシュリーブに語るのも一寸不自然で, 批評家達が種々の推論を施す箇所になっている。

15) Cf. W. Faulkner, p.9, pp.254—5.
分裂したクエンティン, 及びサトペンに同化するクエンティンについての非人称の語りによる説明がある。

16) Cf. Dorrit Cohn, *Transparent Minds* (Princeton : Princeton Univ. Press, 1983), p.281. <saying verbs>を<thinking verbs>と同じように使用する近代の作家の一人としてフォークナーを挙げて, 実際に *Light in August* からの引用をしている。

17) Cf. W. Faulkner p.280. すでに第7章でシュリーブは, ウオッシュの口模似をしたいためにクエンティンの話を中断させて, 次のように言う。
"You wait. Let me play a while now".

18) Cf. William P. Day, *In the Circles of Fear and Desire* (Chicago : The Univ. of Chicago Press, 1985) 憑依, 時間と空間の交錯といったゴシック小説一般に見られる特徴について論じたあと, 特に "The Gothic Fantasy and Narrative Form" の章で Frankenstein の例で, 物語が物語を幾重にも包みこんでゆく語りを説明している。

19) Cf. W. Faulkner, p.335—6.
大橋健三郎『フォークナー研究2』(南雲堂,1979), pp.212—3. 参照。大橋氏は『アブサロム』に於て, 語りと傾聴が極限の形まで混り合った結果, 一見作家自身の語りの自由さが復権したようであっても, 一種客観的な物語が現出していると指摘している。

20) Cf. Donald M. Kartiganer, *The Fragile Thread* (Amherst : The Univ. of Massachusetts, 1979), p.105.
"The center of chapter 9 is the literal confrontation between Quentin Compson and Henry Sutpen. This is all truth ; it contains no conjectures and, therefore, no metaphor."

21) Cf. Estella Shoenberg, *Old Tales and Talking* (Jackson : Univ. press of Mississippi, 1977), p.74. ほとんど "oral narrative" の中で書かれたものが存在するとして, 二通の手紙の重要さを指摘している。

22) Cf. W. Faulkner, pp.129—132.

23) Cf. Thomas D. Young, *The Past in the Present —A Thematic Study of Modern Southern Fiction* (Baton Rouge : Louisiana State univ. Press, 1981), p.10. Allen Tate の *Essays of Four Decades* (p.583) より引用して南部の伝統的な語りは rhetorical mode であること, 又それと対立するのは dialectical mode であると述べている。

24) Cf. Myra Jehlen, *Class and Character in Faulkner's South* (N.Y. : Columbia Univ. Press, 1976), p.53.
"We move in *Absalom, Absalom!* from myth to history and discover that history is more fantastic than any myth."
又, アウエルバッハは, 伝説の記述の仕方は滑らかで人物の行動は単純であるのに対し「われわれ自身が眼にし, あるいは直接の証人から聞くままの歴史の出来事は, もっと多様性があって矛盾撞着が多い」と述べているが, 語り手たちの多角的な解釈を拒まぬサトペン物語は, その発生時からしてすでに歴史性を充分備えていたともいえよう。篠田一士, 川村二郎訳『ミメーシス 上』(筑摩書房, 1967), p.24. 参照。

25) Leon Edel, *The Psychological Novel 1900—1950* (London : Rubert Harte-Davis, 1955), p.97. なお, "Burnt Norton" は *Absalom, Absalom!* と同年の1936年に出版されているのも興味深い。